



Title	宮崎清武町における「無アクセント方言」の談話音調
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88404
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宮崎清武町における「無アクセント方言」の談話音調

郡 史郎

要旨 現在は宮崎市に編入されている旧宮崎郡清武町の談話イントネーションについて、実際の音声によって詳しく知ることができる最古層の実態を音響分析と聴覚判断を併用して調査した。本稿では文節ごとの高さの動きを単調下降型、単調上昇型、平坦型の3種に分け、それを文節の最後での上昇と冒頭での上昇の2種の境界音調と組みあわせることによって談話の音調を記述することを試みたが、この方法でこの談話における終助詞類以外の高さの動きを十分よく記述できたと思われる。分析の結果、意味の限定関係とフォーカス、意味的なまとまりや感情がイントネーションを左右することが確認された。このこと自体は東京などの有アクセント方言と同じだが、意味の限定とフォーカスについてはそのイントネーション決定要因としての強さは東京方言ほど大きくないようである。各文節はその内部で顕著な高さの動きをさせないという意味で「平板的」に言うことが求められるが、文中ではそれを通常は全体的な下降傾向で、ときには上昇傾向で、ときには平坦に発音し、その末尾や冒頭に上昇を適宜つけるというのがこの方言の高さの動きの特徴だと言える。

1 はじめに

「橋」「箸」「端」あるいは「着る」と「切る」などの単語の違いを音の高さの動きで区別しない方言が東北地方南部、北関東、九州などにある。このように語音調に弁別機能がないという意味で「無アクセント」と呼ばれる方言でも、文や談話の中での高さの動き（音調）に地域による違いがあつて、それが各方言の「らしさ」を特徴づけている¹⁾。

そのことを具体的な形で示そうとする研究の一環として、宮崎市およびその周辺の地域の方言における音調のしくみを知り、また、当該方言風に話すとすればどのように高さの動きを使えばよいかを探るのが本稿の目的である。

かつて筆者は当該方言の主に若年層の話者（当時）を対象に、平叙文を中心とした短文のシミュレーション法による発音（用意した文を自分の言いかたに直し、終助詞類を補足するなどした上で、それを実際に話す場面を想定して演じるように言う）を検討した上で、やはり若年層の2名の自然談話における高さの動きの分析を、主に文節間の意味的關係を手がかりに試みたことがある²⁾。その内容は本稿の結果をまとめる際にごく簡単に触れるにとどめるが、当時は談話音調の分析方法が拙く、自分として満足できないものだった。また高年層の話し方について調査できていなかった。

1 単語音調に弁別機能がなくとも、単語あるいは文節が固定的ないし半固定的な固有の音調を持つことがある。宮崎県の都城市やその周辺の方言でも単語音調には弁別機能がないが、文末以外は「尾高一型」のアクセントだとされる（注5参照）。熊本市やその周辺の方言も単語音調には弁別機能がないが、短文の発音を観察するかぎり、半固定的だが文節に固有の音調がある（郡2006）。

2 2009年8月に会話を収録し、同年11月7日に近畿音声言語研究会月例会で報告。

そこで今回『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料(6) —鳥取・愛媛・宮崎・沖縄—』(1982 年)に収録された旧宮崎郡清武町(2010 年に宮崎市に編入)の話者による 1975 年録音の自由会話(以下「清武談話」と略称)を材料として、以前の筆者の方式を改良し定量的な観点を加えた分析手法を用いて、現在詳しく知ることができる当方言の最古層の音調について検討した結果を述べる。この資料には 6 つの話題による合計 30 分弱の会話が収録されているが、本稿では時間の制約のためその後半の 3 つの話題による約 15 分について報告する³⁾。

清武談話の話者は、たがいに身内どうしである 1890 年生まれの男性、1902 年生まれの女性、1914 年生まれの女性、1948 年生まれの男性(話の引き出し役)の 4 名で、話者の世代とその質の点においても、会話の自然さの点においても、そして著名な方言研究者で話者選定だけでなくみずから話の引き出し役として会話に参加された日高貢一郎氏による音声の文字化の信頼性の高さと解説の詳細さの点でも、この資料は当該方言の超一級のものである。

2 先行研究概観

宮崎市とその周辺の方言のアクセントについては、イントネーションの区別がじゅうぶんに意識されていなかった時代の記述だが、岩本実(1983)が「日向方言は、平板一型アクセントで、たとえば、宮崎市近郊では大体次のようである。○○, ○○○, ○○○○, ○○○○○」⁴⁾とまとめている。そして、その説明として「二拍の場合だけ出だしの第一拍が高いような感じがする。(中略)三拍以上は大体において初めと終りが低めで、中間がやや膨らみ気味に高くなる。それは高くなると言ってよいか甚だ微妙である。このようなあいまいな言い方しかできないところが言わば特徴であるかもしれない。(中略)調査の際、話者はいろいろに言うが、くりかえしゆっくり丁寧に言うと、大体平板な中膨らみのようなことになる。つまり落ち着いた発音では目立った起伏のない平板一色の状態であるから、平板一型アクセントと言われるのであろうが、むしろ『無アクセント』という方がより適切であると思う。」と書いている。頼りない記述のようではあるが、単語単独発話ではこのまとめが有効であることは、音響分析を援用した中井幸比古(2007)の調査によって確認されている。全国の実地調査をおこなった平山輝男氏は当地域についてはとりたてて述べることはせず、熊本の「一型アクセント」とひとくくりにしている(平山 1937 など)。このように昭和期までは当該方言の韻律的特徴は単語レベルで「一型アクセント」とラベルづけをするだけで、それ以上の関心は持たれなかったようだ。

文の音調の研究は平成期になって始まった。岸江信介(1996)は県北の延岡市の「句音調」が {○「○, ○「○○, ○「○○○, ○「○○…○} であるのに対して、宮崎市の句音調は {○ ○「○, ○○○「○, ○○○○…「○} だとしている。短文のシミュレーション法による発音を、音響分析の手法を全面的または部分的に用いて分析した考察として、杉村孝夫(1996)、早野慎吾(2006)、そして先述の中井(2007)があり、いずれも文の構造やフォーカス(あるいは強調)

3 高さの測定等の詳細な分析を後半から始めたためである。

が音調を左右していることを指摘している。

現在の宮崎市に行き、街でことばを聞いてすぐ耳につくのは、文末以外の文節の末尾で上昇することが多いということである⁴⁾。こうした文節ないし「句」の末尾での上昇がこの方言のひとつの特徴であることは上記の先行研究にも述べられている⁵⁾。しかし、そうした末尾上昇以外の動きをどう説明するかなど、この方言の音調のしくみの全体像はまだ十分に明らかになっていないとは言えず、特に、当該方言風に話すとすればどのような高さの動きにすればよいかを説明できるというところまでは至っていないように思われる⁶⁾。

3 高さの動きのとらえかた

清武談話の物理的な高さの動きを音響分析の手法を援用して観察すると⁷⁾、東京方言など有アクセント方言での下降アクセント核の実現のような急で大きな下降は文末内部にほぼ限られていることがわかる。

典型的な高さの動き3例を図1, 2, 3に示す。参考として東京方言の例も図4に示す。図は縦軸が高低をあらわす。目盛は50Hzを基準とした半音値で、人間の通常の声域をほぼカバーする24半音分(2オクターブ)を示している。横軸は時間で、目盛は秒である。図と本文でのカタカナ表記と標準語訳は『国立国語研究所資料集』の日高貢一郎氏によるものを使用する。

図1, 2, 3の動きは、子音の性質による局所的な動き⁸⁾を捨象すると、緩やかな下降傾向(単調下降)または上昇傾向(単調上昇)の動き、あるいはほぼ平坦な動きがおおむね文節ごとにある。その上に文節冒頭での上昇や文節末での上昇がつけ加わっている場合があると見ることができ、文末部以外の談話の高さの動きはこれらの組み合わせとして記述できそうだと思えた。文末の文節は単調下降の上に終助詞類(終助詞化したと思われる助動詞含む)の前後での明瞭な上昇と下降が加わった形になっていることが多い。

4 これは現在の福井県福井市および周辺とも共通の特徴である。実際、福井市周辺の若年層話者に「ゆうじはラーメン屋でまゆみにおみやげを渡した」という文をこのままの形で方言風に発音してもらった音声を4名の宮崎市の若年層に聞かせ、話者は宮崎市出身だと思うかどうか問うところ、宮崎市出身だと答えた者は2名いたが、違うと明確に答えた者はいなかった。

5 「句」という表現は杉村(1996)、早野(2006)で使われている。音調的なくぎれの単位ということだろうが、談話のある区間の高さの動きを見て、それをひとつの「句」と見るべきか、ふたつ以上に分けるべきかが明らかでない場合は少なからずある。それは東京方言のような有アクセント方言の談話でも同じである。本稿では「句」という概念を分析の最初の段階からは用いず、文節ごとの高さの動きの方向性を分析の手がかりとする。

6 (現) 宮崎市佐土原町の談話の音調について、山口幸洋(2000)の巻末にモーラ間の高低関係のみによって記録したものが掲載されている。ただ、この記録方式では現実の談話にあるはずの微妙な高低変化がわからない。そのため、残念ながら音調の詳細な研究用の資料としては利用できない。

7 Praat 6.1 を使用。

8 無声の阻害音の直後が高く始まることや、有声の阻害音区間で低くなること。

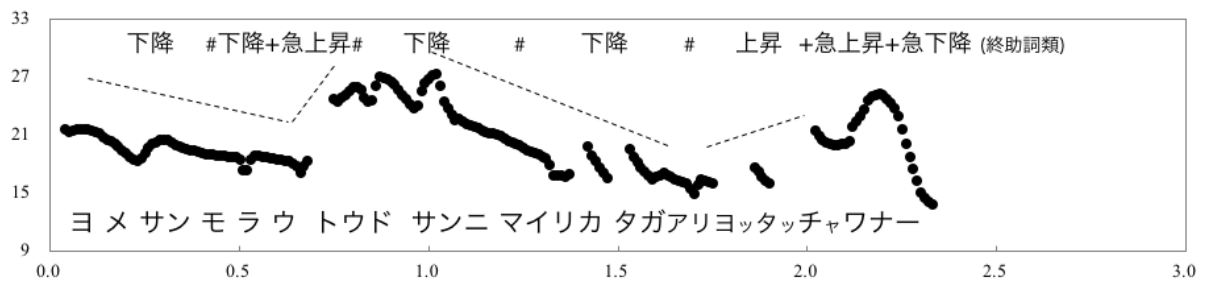


図 1 話者C「嫁さんをもらうと鵜戸神宮にお参りする風習があったもんだったよ」(話題6)

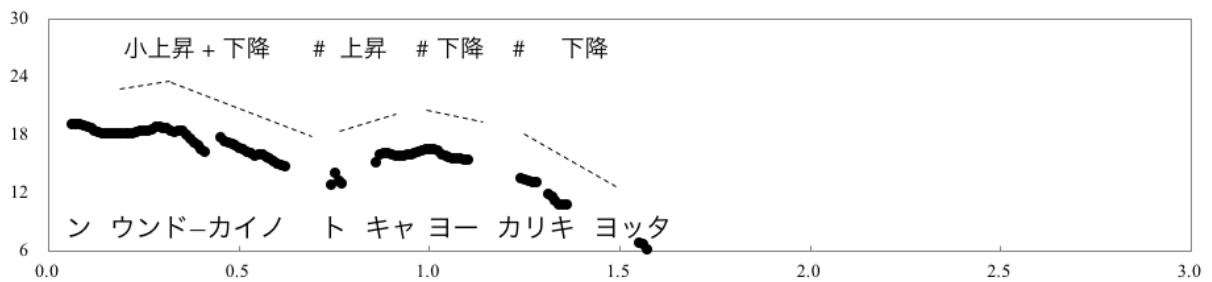


図 2 話者B「うん運動会的时候にはよく借りにきたものだった」(話題4)

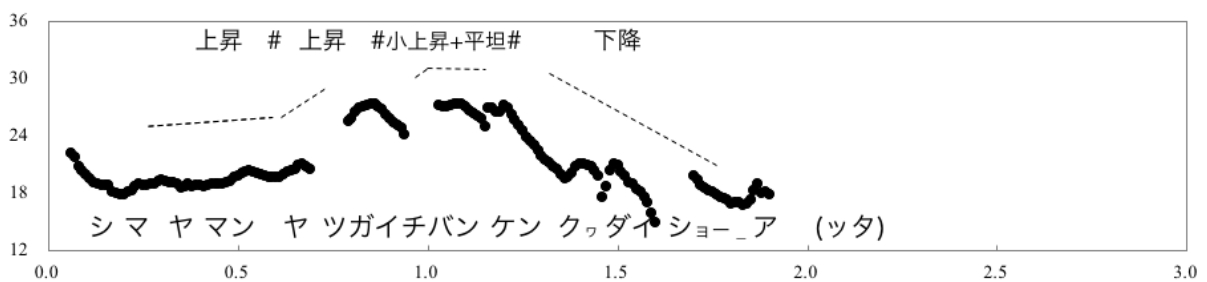


図 3 話者A「島山(地名)の奴がいちばん喧嘩大将(だ)った」(話題4)

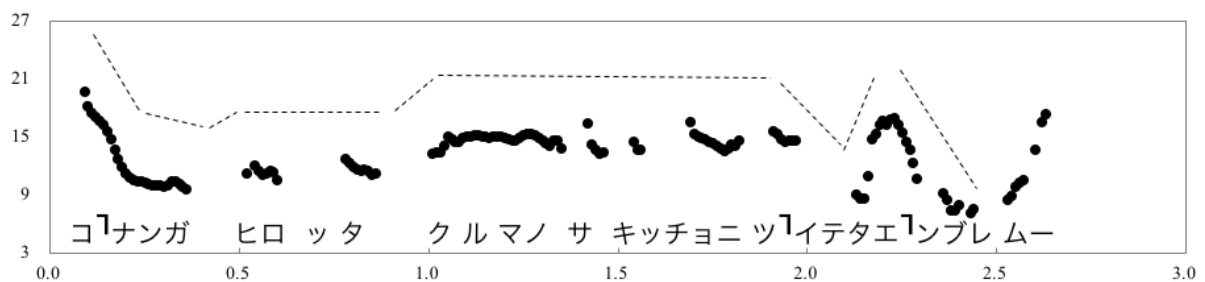


図 4 東京方言の例「コナンが拾った車の先っちょについてたエンブレム」
(最後の上昇はいわゆる「半疑問」の上昇)

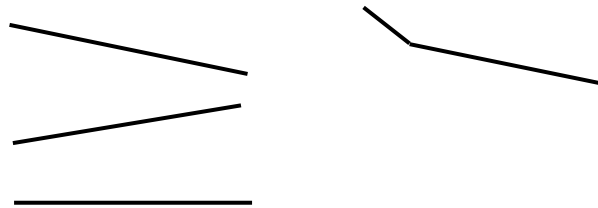
そこで本稿では、試みとしてまず文節ごとの高さの動きと文節境界の前後での高さの動きのパターンを、音響分析と聴覚判断を併用して以下のような音調型に分類した。そして、文の音調をそれらの音形の組み合わせとして考え、高さの動きの大きさも考慮に入れながら文の意味内容との関係を検討することで談話音調のしくみを探る⁹⁾。なお、補助動詞は直前とともに1文節に含める¹⁰⁾。

終助詞類の高さの動きの整理は当該方言風に話すという観点からは非常に重要と思われ、ざっと見たかぎりでも、頻出する「チャ」は直前で下げるか上げる動きが目立つこと、「ナ」は東京の「ネ」と同じく上昇下降調と段上昇調が多いことが指摘できるが¹¹⁾、詳細は別の機会にあらためて検討することとしたい。

●単調下降型：略称「下降型」

●単調上昇型：略称「上昇型」

●平坦型



下降率が小さい単調下降型があるので平坦型との区別はあいまいにならざるをえないが、1秒で2半音程度以上の割合で低くなるものは「下降型」とした。

●文節冒頭での上昇 [多くの場合小さい]：略称「冒頭上昇」

●文節末での段上昇：略称「末尾上昇」

上昇開始は末尾音節の冒頭付近からがほとんどだが、そのひとつ前の音節からのこともある。上昇が後続文節の冒頭まで続くこともよくあるが、それは「冒頭上昇」とはしない。

短くて音調型が判断できない場合は「判断保留」とする。また、2音節の文節で単調上昇に分類した動きの中には、2音節目に一段上昇があるために生じる見せかけの単調上昇のものが含まれる可能性がある。

述語文節については、終助詞類等にもなう独自の上昇や下降を捨象した音調型を考える。文末文節以外で音節内部や音節間での下降がみられることがまれにあるが、それらは「アクセント的下降」として別扱いし、まとめて4.2.3節で述べることにする。

9 本稿では、有アクセント方言の音調記述にふつう使われるようなモーラ間の上昇・下降の付与方式は文末以外では使わない。その理由として、本文に記したようなパターン化でこの談話の音調を比較的簡素な形で記述できそうに思えたため、それを試してみようとしたことがあまずあるが、この談話で文末以外に多く見られる小さい、あるいは連続的な上昇や下降を厳密性を追求してモーラ間の動きとして示そうとすると記述が冗長になる可能性が大きいこと、逆に簡素性をめざすと明瞭であっても本質的ではないかもしれない動きにとらわれて全体像の把握を誤る可能性があると考えたからである。

10 郡(2020)による東京方言の音調記述における基準に準じた扱いだが、これはこの資料の全体像を見た結果、当方言でも補助動詞が基本的に音調的な独立性を持っていないと判断したためである。

11 郡(2020)参照。同書では「段上昇調」ではなく「強調型上昇調」と呼んでいるが、そのことについて同書p.221の注25参照。

4 「清武談話」の高さの動きの特徴

以下では、2つ以上の文節がポーズなしで続いている場合をとりあげ、音調型とその組み合わせの特徴について検討する。なお、述語にはほとんどの場合固有の高さの動きを持つ終助詞類が含まれており、その動きについては本稿の検討対象としないことはすでに述べたが、述語文節のあとに補足される文節は高低の変動が小さいものが多く、他と音調的な条件が異なるので、これも検討対象から除く。さらに、以下のように発話状況に問題がある場合も検討対象から除外する：(1) 他の話者の声との重畳の分離がむずかしく、音高の正確な観察・測定ができない場合、(2) 笑いながら発声しているために、通常の音調と異なる可能性がある場合。また、4名の話者のうち話者Dは話の引き出し役に徹しており発話数が少ないため、これも検討対象から外す。結局、残り3名による合計613文節が検討対象となった。3名の話者のデータ数はそれぞれ193, 213, 207で、大きな差はない。

4.1 音調型の数から見た全体的な特徴

図5に示すように、全体として下降型の文節が圧倒的が多い。ここにはそれに「冒頭上昇」「末尾上昇」が加わった場合も含めているが、それで全体の76%を占めている。

話者別に見ると、最年長の話者Aは上昇型が多めである。逆に最年少の話者Cは上昇型が少なめである。対象とした文節の総数に占める上昇型の割合はA B Cそれぞれ4.7%, 3.6%, 2.4%であった。感嘆の気持ちを込めた発言だが、話者Aには文節を越えて上昇を続ける発音が何度か見られた。図6にその例として話題5の「ナニヤ マ ミシラン トキ ナッチョール」（何はまあ見知らぬところになって〔しまつて〕いる）を示す。上昇型の多寡は世代性の可能性がある。

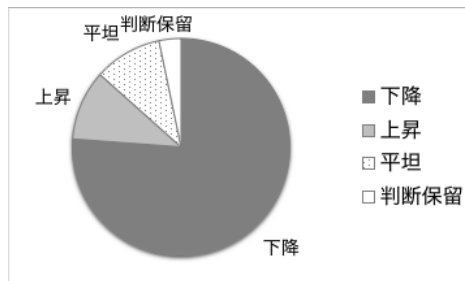


図5 音調型の割合（話者A B C 3名の合計）

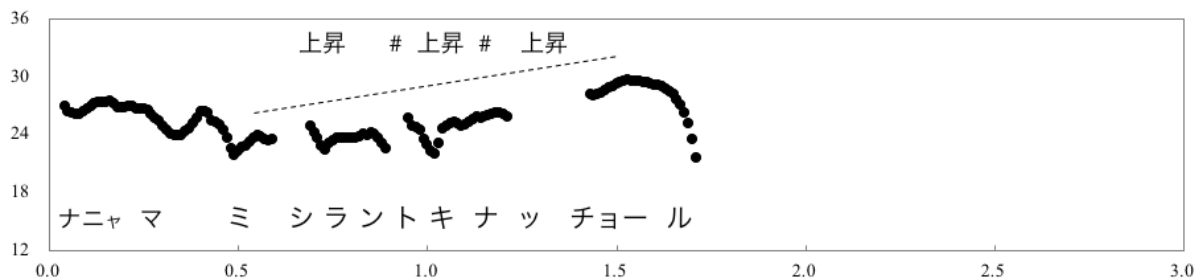


図6 文節を越えて上昇が続く例

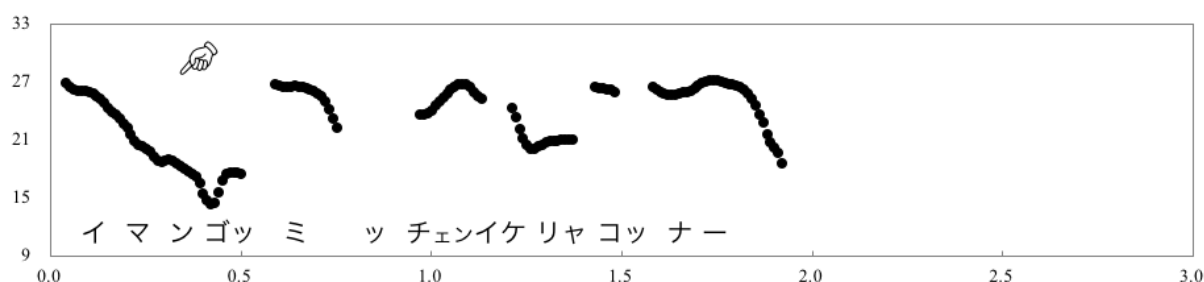


図7 発言冒頭での大きな下降の例

4.2 下降型文節の下降量

下降の大きさにはさまざまある。定量的な検討はおこなっていないが、一般に文末の述語文節では大きいように思われる。

一方、発言の最初の文節で9半音程度以上の大きな下降が見られることが時としてある。これは特に話者Aに多いが、感嘆や感慨の気持ちを含む発言か、伝えたい気持ちや聞きたい気持ちが強い発言のようで、そうした発言では冒頭だけでなく全体に高低の動きの幅が広い。例として図7に話題6の話者A「イマンゴッ ミッチェン イケリャコッナー」（今のよう道路でも良ければこそなあ：冒頭文節でおよそ9.0半音下がるがその直後の文節でほぼ同量上がる）の動きの高さを掲げる。問題となる箇所を指さし記号で示している。別の例としては、話題4の話者A「ムカシノター キガ ソロチョッタワナー オッジャカリ」（昔の〔人〕は気が揃っていたよなあ だから：冒頭11.7半音下がり、その直後でほぼ同量上がる）、話題6の話者C「シャムショガナ...」（社務所がなあ〔火事があるって〕：伝えたい気持ちが強い例で、冒頭8.8半音下がり「な」で10.4半音上がる）などがある。

4.3 末尾上昇と冒頭上昇

文節末に段上昇がつく文節は対象文節（ここでは文末の述語文節除く）のうち143(31%)に見られた。1節で述べたような街で感じる印象ほどは多くない。そして、その83%にあたる119例は下降型の文節についていた。

これに対し、文節冒頭での上昇がつく文節は82だった（文末の述語文節含む）。その直前に別の文節がある場合60例のうち、83%にあたる50例はやはり下降型の文節についていた。

・末尾上昇と冒頭上昇の大きさ

末尾上昇と冒頭上昇では上昇の大きさが異なる。図8に示す度数分布からわかるように、冒頭上昇は5半音未満のものがほとんどである。これに対し、末尾上昇には5半音未満のものとそれ以上のものに分かれる分布をしている。これは上昇量が測定可能だった冒頭上昇38例（ポーズ直後は対比すべき高さが存在しないので対象外）と末尾上昇142例に限定した数値である。

図9に冒頭上昇が大きい例として話題4の話者B「タノン テンケンジャニモ メリヨッタナー」（田野〔隣町〕の天建神社にもお参りしたものだったなあ：5.3半音上昇）の動きをあげておく。

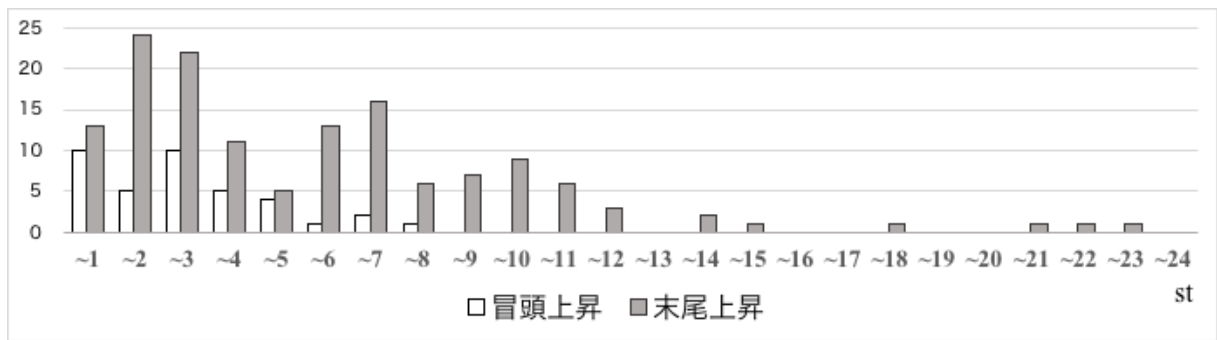


図 8 末尾上昇と冒頭上昇の大きさの度数分布（単位：半音）

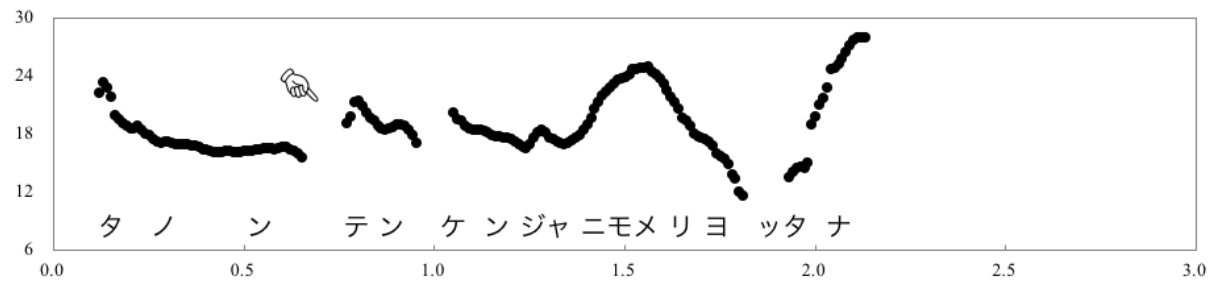


図 9 冒頭上昇の典型例

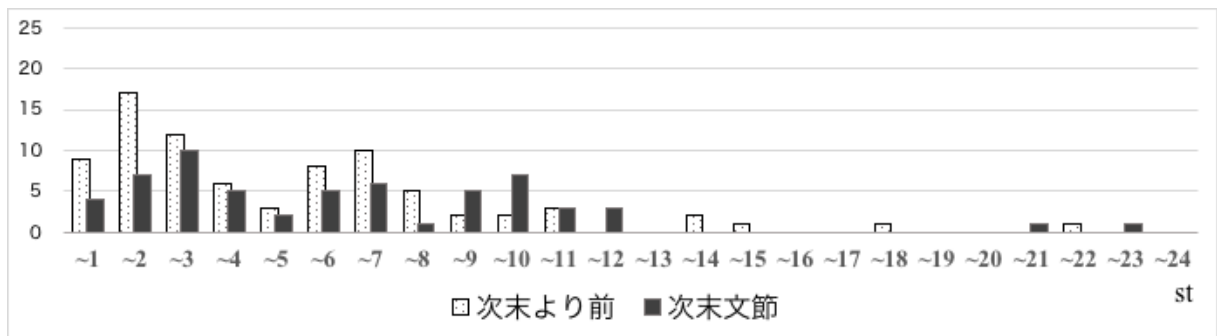


図 10 末尾上昇の大きさの文内位置による違い

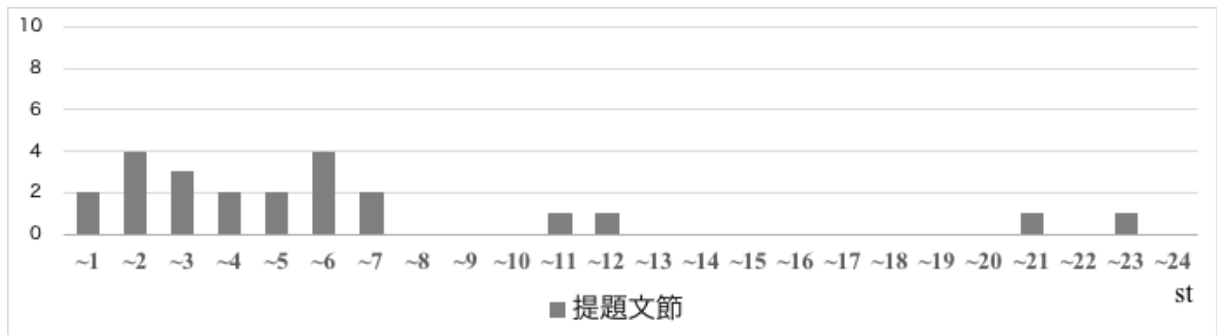


図 11 提題文節での末尾上昇の大きさ

・末尾上昇の大きさ

末尾上昇の大きさは文内での位置によって少し異なるようである。図 10 の度数分布はこれを文末の述語文節の直前のもの（次末文節の末尾）と、それ以前の位置にあるもの（次末より前のもの）で分けて示したものである。述語文節の直前では少し上昇が大きいことがわかる¹²⁾。

・末尾上昇がつく文節（提題文節）

末尾上昇がどのような文節につくかという観点から顕著なのは、ひとつは共通語の助詞「は」や「って」に相当する形式を持つ提題の文節（対比の意図で使われる場合もある）、そしてもうひとつは伝えたい気持ち・聞きたい気持ちが特に強い箇所を含む文節、つまりフォーカスがある文節、そして感嘆の気持ちを込めた発言や興奮した発言においてである。

提題文節については 29 例を認めたが、そのうち約 8 割にあたる 23 例に末尾上昇が見られた。末尾上昇があったものについて上昇量の度数分布を図 11 に示す。提題文節は末尾で上昇させることが多いとは言えるが、図 8 に見られる末尾上昇一般の分布と比べると、提題文節の上昇量には特段の傾向がなさそうである。

・末尾上昇がつく文節（伝えたい気持ちが強い文節）

フォーカス（伝えたい気持ちの強さの焦点）については、会話内容からその位置を特定して高さとの関係を定量的に示すことはむずかしい。そのため定量的な検討はここではおこなわない。しかし、たとえば図 12 に示す話題 5 の話者 C 「マエモウシロ↑モ ウレチョットヤロ アッコワ」（**前も後も**売れているんでしょ あそこは：8.1 半音上昇）、あるいは話題 6 の話者 B 「イマ↑モ ウエカリ」（**今でも**上から〔行くのよ〕：17.8 半音上昇）、話題 4 の話者 C 「オジサンタチ↑モ イキヨンナッタチャロー」（**おじさん（A のこと）たちも**行ったもんだったんでしょ：9.5 半音上昇）のようにフォーカスがあることが明らかな文節では末尾上昇は大きい（上例では記号↑で示した）。なお、ひとつめの例では「マエモ ウシロモ」（前も後も）という 2 文節でひとつの音の動きのまとまり（緩やかな下降）になっているが、これは「まわりが全部」のように意味的にひとまとまりの概念として言っているためと思われる。

・末尾上昇がつく文節（感嘆の気持ちがある発言・興奮しての発言など）

感嘆の気持ちを含む発言の例として、図 13 に示す話題 6 の話者 B 「テゲニャ オイカリヨッタツナ」（非常に多かったものだったよなあ：9.6 半音上昇）、興奮しての発言の例として、図 14 に示す話題 6 の話者 A 「アルケッ↑ドン ハダカ↑デ メルヤトウ↑ガ オッドカイ イマ」（〔お参りは〕あるけれども裸でお参りする人がいるだろうか今どき：それぞれ 7.0, 8.6, 10.0 半音上昇）がある。これらの場合も末尾上昇が大きいものがめだつ。

12 次末文節での末尾上昇はそれ以前のものより平均で 1.3 半音大きい。ウィルコクソンの順位和検定の結果、 $W=1934$, $p=0.030$ で統計的有意差を認める。

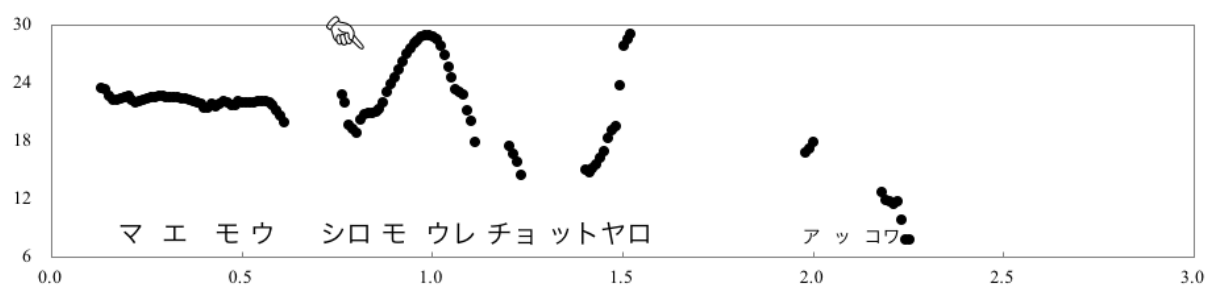


図 12 フォーカスにともなう大きな末尾上昇の例

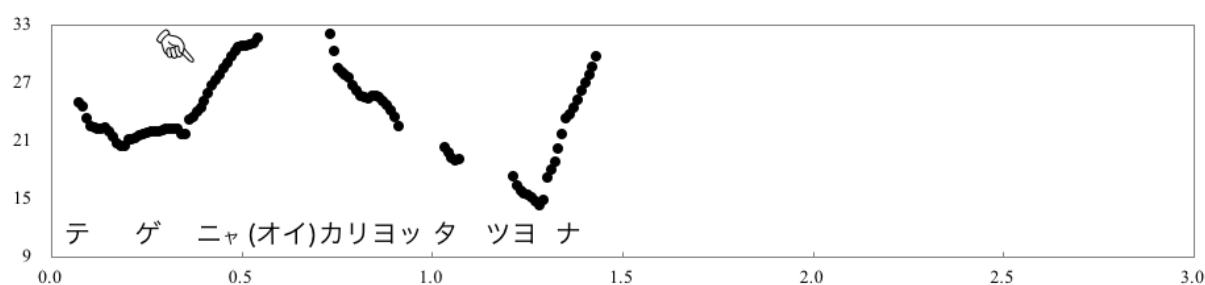


図 13 感嘆の気持ちがある発言での大きな末尾上昇の例

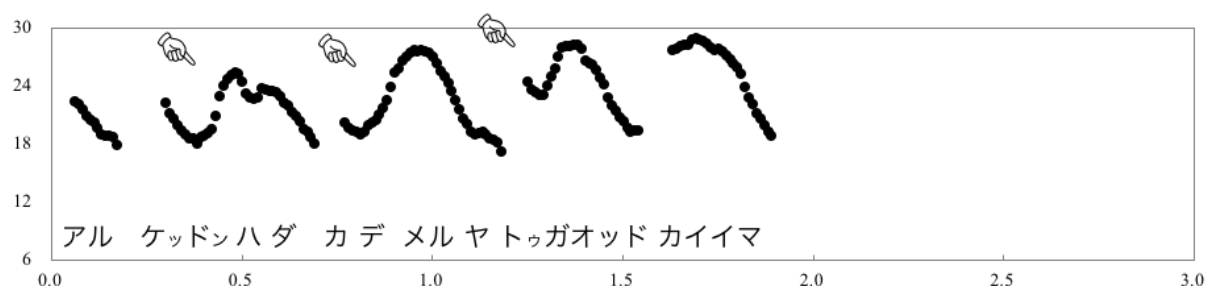


図 14 興奮しての発言にともなう大きな末尾上昇の例

4.4 音調型の組みあわせから見た特徴

前節で見たように総数の 3/4 を占めるのは下降型の音型である。したがって文節が 2 つ続く場合に多いのも「下降型＋下降型」である。

今、述語文節にはアクセント的上昇やアクセント的下降などの独自の動きが多いことをふまえて、述語文節とその直前の文節の組み合わせを別にして、それ以外の 2 文節の組み合わせを考えると¹³⁾、「下降型＋下降型」の組み合わせは 138 例で、2 文節連続全体（総数 256）の 53% を占める。この数値には文節境界の前後に末尾上昇や冒頭上昇が入っている場合も含めている。

このうち、文節境界の前後に末尾上昇や冒頭上昇がない「下降型＋下降型」（2 文節目に末尾上昇がつくことはあるが、これを以下では「純『下降型＋下降型』」と称する）は上述の 2 文節連続

13 述語文節とその直後の補足文節はもともと対象外としている。

全体の 21%, 55 例にすぎない。逆に言うと、文節境界の前後に末尾上昇や冒頭上昇をとともなう「非純」の「下降型+下降型」が全体の中で占める割合がもっとも多い (32%) ということだが、それでもそれが支配的な動きだと言えるほどではない。

純「上昇型+上昇型」や純「平坦型+平坦型」は少なく、それぞれ 6 例、4 例にすぎない。したがって、文節を越えて同じ音型がそのまま末尾上昇や冒頭上昇なしに続いている場合（純同音型連続）は少ないということになる。純同音型連続は 2 文節連続全体の 25%にとどまる。

述語文節とその直前の文節の組み合わせでも事情はほぼ同じである。述語文節内の終助詞類等にとともなう独自の上昇や下降を無視した音調型で考えると、文節境界の前後に末尾上昇や冒頭上昇が入っている場合も含めた「下降型+下降型」が全体の 54%と半数強で、純「下降型+下降型」は 26%になっている。

・音調型の組みあわせに見る意味的な制約（意味的限定）

ここで言う「意味的限定」とは、筆者が日本語のイントネーションの説明に用いている概念で、ある単語について、それが指し示すものや、それがあらわす動作や状態のありかたを限定する作用を指す。たとえば「花」という単語はそれが具体的に何を指すのかの可能性はさまざまあるが、「道に白い花が咲いていた」と言うときの「白い花」では、他の色の花でも単なる花でもなく白い花だと限定している。これに対して「道に白い雪が積もっていた」と言うときは、「雪の中でも白いもの」という意味で「白い雪」と言っているわけではない。雪はふつう白いからである。つまりこの「白い」は「雪」の意味を限定しておらず、視覚イメージを喚起するための補足的情報になっている。東京方言では「白い花」と「白い花」のイントネーションは通常異なるが、それは意味的限定の有無による。大阪方言でも同様であり、また無アクセントに通常分類される熊本方言でも意味的限定の有無がイントネーションを左右する重要な要因になっている¹⁴⁾。宮崎でも同じことが言えそうである。これをこの清武談話で見てみよう。

述語文節とその直前の文節には常に意味的限定関係があるのでこれを除外するが、それ以外の 2 文節の組み合わせのうち、前が後を意味的に限定していると判断したものが 87 例あった。そのうち、文節境界の前後に末尾上昇や冒頭上昇がない純「下降型+下降型」をとるものが 36 例、そして純「上昇型+上昇型」が 4 例、純「平坦型+平坦型」が 1 例で、文節を越えて同じ音型がそのまま続いている純同音型連続が合計 41 例あった。これは純同音型連続 65 例の 63%を占める。つまり、先に見たとおり全体の 25%と少ない純同音型連続だが、その約 2/3 が意味的限定関係のある場合ということである。

一方、意味的限定関係がある 2 文節連続に限れば、そのうちの 47%, つまり 5 割弱が純同音型連続、つまり 1 音調句になっている。

このように、意味的限定関係があればかならずというわけではないが、意味的限定の有無がイントネーションを左右する重要な要因になっており、清武談話の場合は純同音型の連続にな

14 東京方言については郡(2020, p.30ff), 大阪方言については郡(2012), 熊本方言については郡(2006)。

りやすいということが言える¹⁵⁾。

「白い雪」のように、文法的には修飾関係であるようでも意味的には限定関係にはない文節連続は、清武談話では純同音型の連続になっていない。図 9 にすでに示した「タノン テンケン ジャニモ」(田野〔隣町〕の天建神社：下降型+冒頭上昇+下降型)のほか、話題 5 の話者 A「クロサカン オチアイサンカタンモト」(黒坂〔地名〕の落合さん〔人名〕の家のそば：下降型+冒頭上昇+下降型)、話題 6 の話者 A「オカンシタン シンゾシュジャネカッタロカイ」(岡の下〔地名〕の新造さん〔人名〕じゃなかったらどうか：下降型+末尾上昇+下降型)でも同様である。

4.5 その他の特徴

4.5.1 複合語の音型

2 要素から成る複合語で、前部要素と後部要素がそれぞれ別の音型をとる場合や要素境界の前後に上昇が見られる場合が、多くはないがあった。これは複合語の構成要素が音調単位になりうることを示す¹⁶⁾。例として図 15 に話題 6 の話者 C「オクラオバサン モライナツタトキ」(おクラおばさん〔A の妻〕を〔嫁に〕もらいなさったとき：「おクラおばさん」が下降型+末尾上昇+下降型)を示す。

4.5.2 感嘆表現のイントネーション

感嘆の気持ちがある場合は末尾上昇が大きくなることを 4.3 節で述べた。しかし、特に擬音語・擬態語や強意の文節(「非常に」「みんな」などに相当するもの)では、母音や撥音を伸ばしながら文節全体を大きな上昇型で言うことも多いようである。例として話題 5 の話者 C「ズーッ デキチョルケン マダー」(ずーっと できているけれども まだ...)と話題 4 の話者 B「ヒャクショー シショランデ↓ン 〆ミンナ デランナランカッタッチャムナー」(百姓をしていなくても皆出る〔参加し〕なければならなかったんだものなあ)を図 16 と図 17 に示す。話題 5 の話者 B の「〆ホニーノ ウッボンコン ヤマモヨ」(ほんの山も)も同じ。

また、感嘆表現が平坦型で続く場合もある。図 18 に示す話題 6 の話者 A「ウミヤヒリムン ジャネー マワツチェン マワツチェン ウンバッカッジャガチ」(「海は広いものだねえ〔七浦七峠を〕回っても回っても海ばかりだよ」と〔言って〕)がそれである。

強意の文節が高い声域で緩やかな下降型で発音されることもある。図 19 に示す例は話題 6 の話者 B「モ ソレコソ 〆モー ケンベツ マイリヨッタッチャカンナー」(もうそれこそもう軒別〔全戸が〕お参りしていたものだったからね)である。

15 東京方言では意味的限定関係が文のイントネーションを決めるもっとも大きな要因のひとつである。具体的には直前の文節から意味的に限定されるとアクセントを弱める(=アクセントの音声としての実現度を抑える)が、実際の言語使用では、意味的限定関係がある環境でアクセントが弱まって先行文節と 1 音調句を形成するのは、筆者が調査した会話資料で約 7 割だった(郡 2020, p.209 参照)。10 割にならないのはフォーカスや感情といった要因との干渉があるためと推測される。

16 単語の読みあげ調査で「ブッシュ大統領」「佐藤花子」のような複合語に 2 つの音調の山があらわれうることが中井(2007)に報告されている。

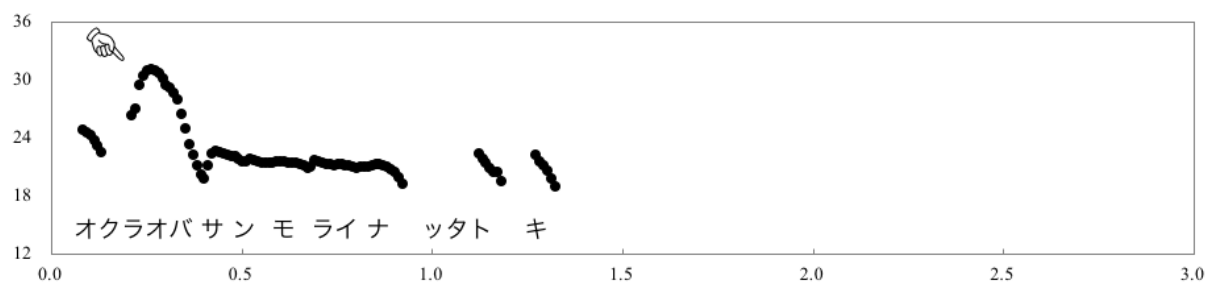


図 15 複合語が2つの音調単位になっていることがわかる例

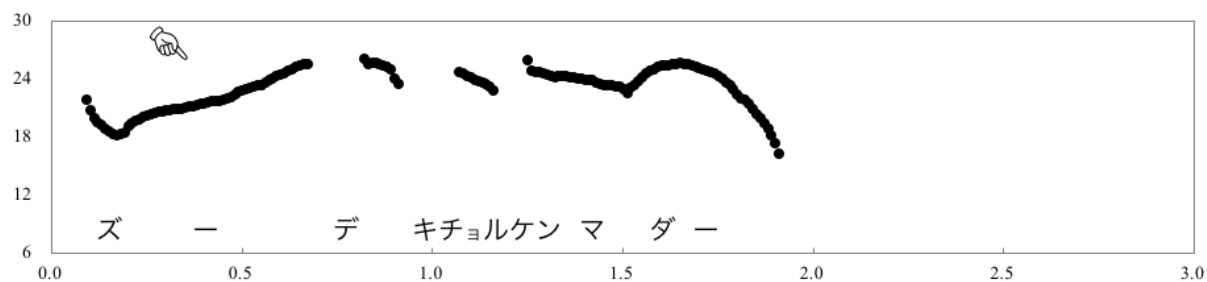


図 16 感嘆表現で擬音語・擬態語が上昇音型をとる例

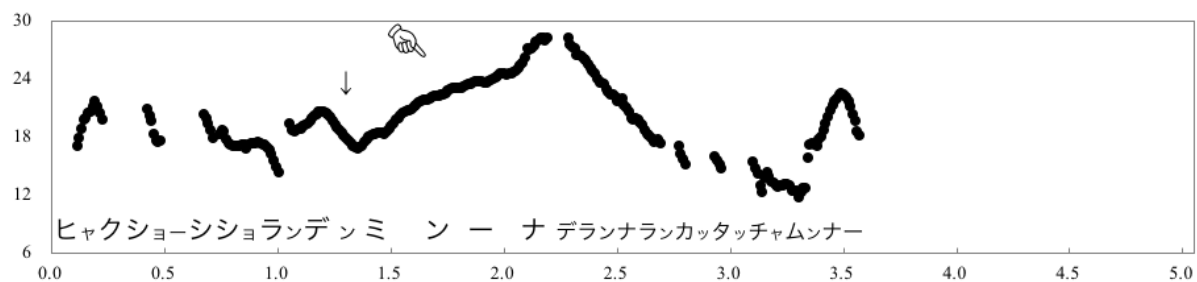


図 17 感嘆表現で強意の文節が上昇音型をとる例

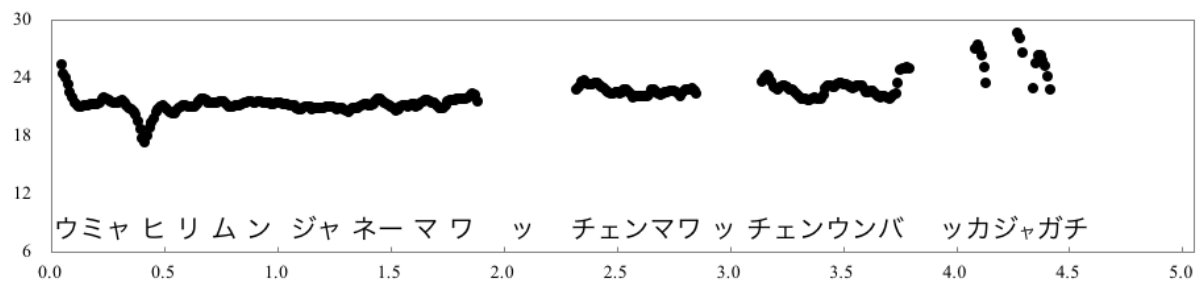


図 18 平坦音型が続く感嘆表現

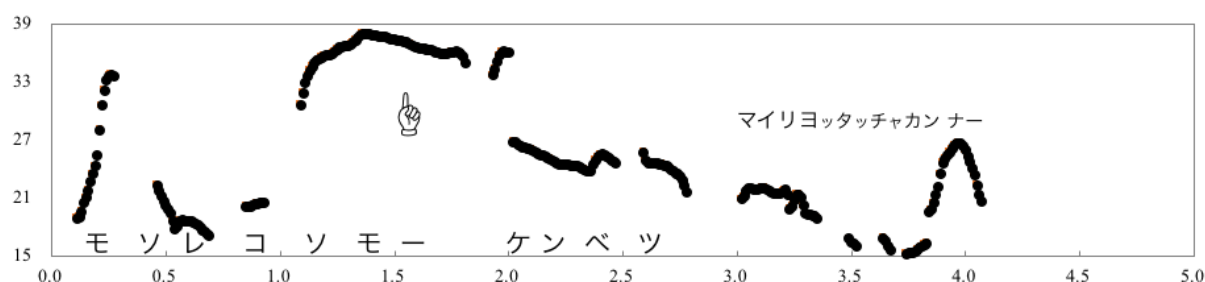


図 19 強意の文節での高く緩やかな下降の例

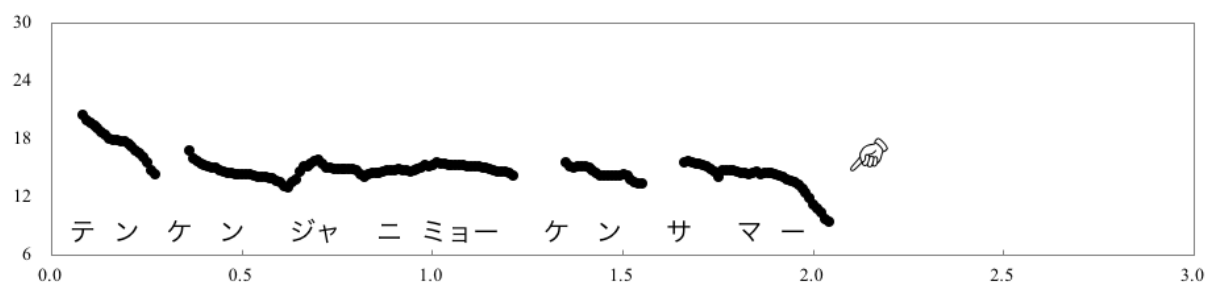


図 20 言いよどみや言いさしで発言が中断する際のアクセント的下降

4.5.3 文末の述語文節以外でのアクセント的下降

ほとんどは以下のような随意的で局所的なイントネーション現象と理解できる。

・感嘆表現にともなう上昇の直前

前節で述べた感嘆表現にともなう文節全体の上昇に際して、上昇する文節の直前の音節でいったん明瞭に下降させる例が複数見られた(図 17 で、図中の小さい↓印箇所)。他に話題 5 の話者 A 「クルマ↓ガ ヒヤートウ イクムン」(車が[中まで]ずーっと 行くよ)、同じく「クロサカカッ↓ マーッスグ」(黒坂からまっすぐ)があった。

・言いよどみや言いさしで発言が中断する場合

かならずではないが、発言の中断前にアクセント的下降があらわれることがある。具体的には、話題 4 の話者 B 「アオシamani マイッタ↓リ / ツジノ オドヨ」(青島〔神社〕にお参りしたり ツジのオドよ: 列挙しようとして / で示した箇所約 0.3 秒中断)、同じく「テンケンジャニ ミョーケンサマ↓ー」(天建神社に妙見様: 列挙しようとして思い出せないままこのあと約 1.5s 中断)がある。ふたつめの高さの動きを図 20 に示す。このほか、話題 5 の話者 C 「ズーッ デキチョルケン マダ↓ー / チットモ」(ずーっとできているけれども まだ 少しも...: 約 0.5 秒中断, 図 16)、話題 6 の話者 A 「クラブット イマ↓ー / ナンノ ヒカクニャ ナルメー」(比べると今は何の比較にはなるまい: 約 0.8 秒中断)、話題 6 の話者 B 「シャンシャンウマン ソレニ ビラン ゴンゲンサマ^{ここのびら}メー↓リ / ヨナー」(シャンシャン馬にそれに九平〔地名〕の権現様参りよなー: 約 0.9 秒中断)もある。

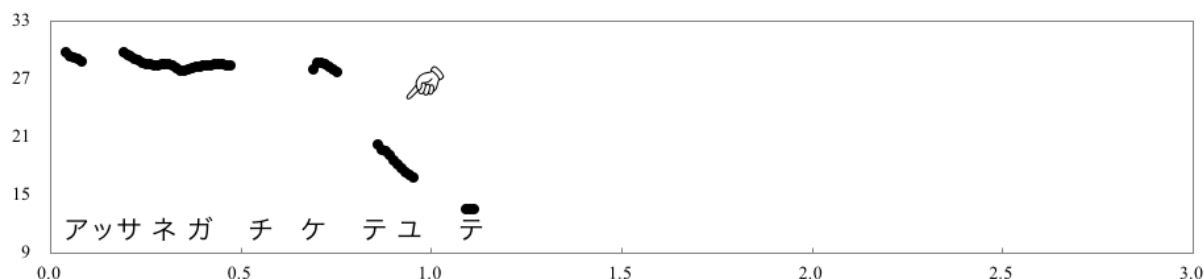


図 21 引用の助詞の前でのアクセント的下降

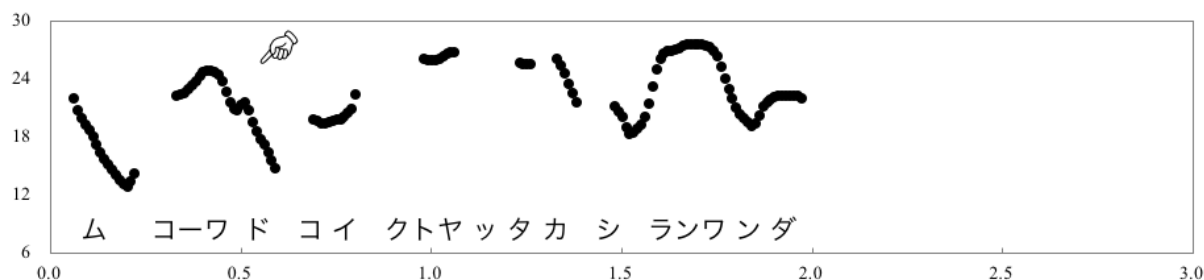


図 22 疑問詞疑問文の前の下降

・引用の「て」に相当する表現の前で

以下の 3 例でのアクセント的下降は引用の助詞の性質として理解できそうである。それは図 21 に示す話題 5 の話者 C 「アッサネガ チケ↓テユテ」(あっちのほうが近いと言って), そして同じく「トチガ ホシー↓チ ナットヤゲナケンヨ」(土地が欲しいとおっしゃるらしいけれどもね), 話題 6 の話者 B 「ウドサンノ ハシ エワタランゲナ↓ツテ」(鶴戸神宮の橋を渡ることができないそうだと言って) である。

・疑問詞疑問文の前での下降

図 22 に示す話題 6 の話者 A 「ムコーワ↓ ドコ イクトヤッタカ シランワ ンダ」(向うはどこに行くのだったかしらん) では文節間の下降が見られる。話題 5 でも話者 A 「ミヤダイノ ナニバ↓ ドクイ トッタッチャロカイ」(宮崎大学〔予定地〕の何をばどこに取っ〔て捨て〕たんだろうか) でも同じ。杉村(1996)に示された疑問詞疑問文のシミュレーション発話例には出てこないようなので、疑問詞疑問文に常にともなう特徴ではなさそうだ。感慨や驚嘆の気持ちを込めて言うときに疑問詞疑問文を低く始める言い方があるということかもしれない。他の資料を使った今後の検討に委ねたい。

5 まとめと考察

現在は宮崎市に編入されている旧宮崎郡清武町の談話イントネーションについて、実際の音声によって詳しく知ることができる最古層の実態を音響分析と聴覚判断を併用して調査した。

- ・本稿では文節ごとの高さの動きを単調下降型（略称，下降型），単調上昇型（略称，上昇型），平坦型の3種に分け，それを文節の最後での段上昇（末尾上昇）と冒頭での上昇（冒頭上昇）の2種の境界音調と組みあわせることによって談話の音調を記述することを試みた。

今回分析した談話の高さの動きは，検討対象から除外した終助詞類の音調以外はこの方法で十分よく記述できたと考えるが，これはこの方言の音調の単位が文節であることを示す。

- ・複合語の構成要素も音調単位になりうる。この談話では数は多くないが，1節で触れた2009年当時の若年層の会話でも「百姓うどん（店名）」「リサイクルショップ」のように構成要素ごとに別の高さの動きがあるために全体として2音調単位と見ることができものがあつた。中井(2007)にもこのことを示唆する記述があつた。

- ・上記の音形のほかに，有アクセント方言でのアクセントにともなうような顕著な下降が見られることがある。しかし，それは感嘆表現にともなうもの，発言が中断する場合，引用の「て」に相当する表現にともなうものという随意的で局所的なイントネーション現象として理解できるものがほとんどである。

- ・文節がとる音型は下降型が多い。その上に冒頭上昇や末尾上昇が加わった場合も含めると，調査対象とした文節全体の約3/4を占める。上昇型は感嘆のような感情を込めた発言で使われる例が目立つが，型の種類自体には明確で固定的な機能や意味はなさそうだ。

- ・文節の末尾での上昇や冒頭での上昇は非常に多いとは言えない。

- ・以上から，この方言では各文節はその内部で顕著な高さの動きをさせないという意味で「平板的」に言うことが求められるが，文中ではそれを通常は全体的な下降傾向で，ときには上昇傾向で，ときには平坦に発音し，その末尾や冒頭に上昇を適宜つけるというのが高さの動きの特徴だと言えよう。

先行研究によれば単語の読みあげ発話には明瞭な高さの動きを感じにくいようだが，それは文節内部で顕著な高さの動きをさせないという制約があるためということの説明できる。

どのような場合に文節全体が上昇傾向あるいは平坦になるのかの解明が，終助詞類の音調の記述とあわせて今後の検討課題になりそうである。

- ・上昇型は最年長の男性話者（1890年生まれ）が多めに使っており，最年少の女性話者（1914年生まれ）は少なめである。最年長の男性話者は文節を越えて上昇型を使い続けることがある。ただし，それは感嘆の気持ちを込めた発言である。感嘆の気持ちを込めた発言では平坦型の連続も見られる。

- ・下降型の下降量や上昇型の上昇量，そして末尾上昇の上昇量は，伝えたい気持ち・聞きたい気持ちが強い場合（フォーカス）や感嘆のような感情を込めた発言では大きくなっている。

- ・末尾上昇は、文末の述語文節の直前では大きめのものが使われている。
- ・提題の文節には末尾上昇がよく使われている。
- ・意味的限定の有無がイントネーションを左右する要因になっている。このこと自体は1節で触れたシミュレーション法による短文発話の検討で得ていた知見であるが、それを談話資料で確認したことになる。文節境界の前後に末尾上昇や冒頭上昇がない「下降型+下降型」「上昇型+上昇型」「平坦型+平坦型」という純同音型連続は、前の文節が後を意味的に限定する場合にあらわれやすい。清武談話では、意味的限定関係がある2文節連続の約5割がこのような純同音型連続、つまり1音調句になっている。

意味的限定の有無がイントネーションを左右する要因であることは東京などの有アクセント方言と同様であり、通常「無アクセント方言」とされる熊本とも同様である。

ただ、1種類ずつの談話資料の比較にすぎないが、注15で触れたように、東京方言の談話での実態として意味の限定関係下での音調句形成が7割の場合にあるのに対して清武では5割という違いを見ると、この方言では東京よりも意味的限定による音調の制約が弱いと言えそうである。

- ・「前も後も」のように2文節が意味的にひとまとまりの概念をあらわす場合に、それがひとつの音調句にまとまることがある。東京方言でもたとえば「兄と弟」に生じるイントネーション現象である（郡2020, p.62f）。

・フォーカスについては、その位置をうまく特定することは談話ではむずかしい。そのため本研究では直接の検討対象とはせず、フォーカスがあることが明らかな場合について、下降型の下降量や末尾上昇の上昇量が大きいことのみを述べるにとどめた。しかし、中井(2007)はシミュレーション法による短文の読みあげ資料の分析にもとづき、フォーカス文節よりも前は個々の文節が独立した（高さの）山を形作ることが多いが、フォーカス文節よりも後は各文節が独立した山を作ることが少ないと述べている。これは東京方言とまったく同じ特徴であり（郡2020, p.47ff）、また熊本方言にもあてはまることである。しかし中井は同時に、実際にはこれに当てはまらない発話も数多いと言う。したがって、フォーカスによる音調の制約も弱いと言えそうである。

・意味の限定とフォーカスのほか、意味的なまとまりや感情がイントネーションを左右することも東京や大阪などの有アクセント方言と同じである。ただ、上記のように、意味の限定とフォーカスについては、そのイントネーション決定要因としての強さは東京方言におけるほど大きくないようだ。

・以上見たような傾向は現代の宮崎市やその周辺の中年層以下の話者にもおおむねあてはまりそうである。これは1節で触れた2009年当時の若年層の自然会話の中間的分析を簡単に再検討した結果と、今回とりあげなかったが18名の話者に対するシミュレーション法による意味的限定とフォーカスについての調査結果にもとづく。

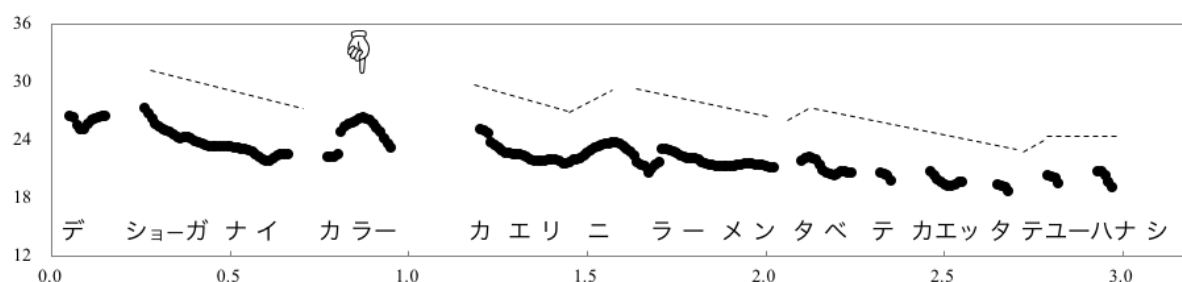


図 23 若年層話者の談話における発言例

図 23 にこの自然会話での 1973 年生まれの女性の発言例「で、しょうがないから帰りにラーメン食べて帰ったっていう話」を示す。全体の動きとして、文節ごとの下降型が支配的で、文節の前後に上昇をとまなうことがあることがわかるが、これは本稿で分析した清武談話と共通の特徴である。ただ、この「しょうがないから」に見られるような文節末での上昇下降調がこの会話全般に多く見られる。これは清武談話にはみられないものだが、現代の東京方言などと同じ現象であり、その言い方の採用、つまり共通語化の一種と見ることができそうである。

文献

- 岩本実(1983)「宮崎県の方言」『九州地方の方言』国書刊行会。
 岸江信介(1996)「宮崎県のアクセント概観」『宮崎県地方史研究紀要』22, 109-123。
 郡史郎(2006)「熊本市および周辺の非定型アクセント方言における語音調と音調句の形成」『音声研究』10(2), 43-60。
 郡史郎(2012)「現代大阪市方言における低起式アクセントの特徴」『音声研究』16(3), 59-78。
 郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店。
 国立国語研究所(2008)『日本のふるさとことば集成 全国方言談話データベース 第18巻 福岡・大分・宮崎』国書刊行会。
 杉村孝夫(1996)「無型アクセント方言のイントネーション—宮崎県清武町方言の質問表現におけるイントネーション付与規則—」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点 下巻』。
 中井幸比古(2007)「宮崎県中部方言のアクセント・イントネーション」香川県話し言葉研究会編『宮崎県中部・鹿児島県大隅方言調査報告』香川県話し言葉研究会, 44-79。
 早野慎吾(2006)「無アクセントの比較研究—栃木・茨城アクセントと宮崎アクセントの比較—」『地域文化研究』(宮崎地域文化研究会) 1, 23-32。
 平山輝男(1937)「九州アクセントとその境界線」『音聲の研究 VI』209-223。
 山口幸洋(2000)『日本語方言一型アクセントの研究』ひつじ書房。